入試年度	2026 年度	入試時期	Ⅰ期入学試験	実施日	2025 年 9 月 26 日
課程	博士前期課程	研究科	国際日本学研究科	専攻・コース	国際日本学専攻 英語教育学研究領域
入試方式	一般入学試験/ 外国人留学生入学試験		試験科目	専門科目	

「出題の意図」および「解答」または「解答例」

【出題の意図】

本研究領域の入試では，英語教育学研究における基礎的な知識，特に第二言語習得，学習者要因，授業実践，教材・指導法などに関する主要な概念や理論を正確に理解しているか，また，それらを教育実践と関連づけて，論理的かつ批判的に自らの見解を述べることができるかどうかを評価します。

【解答例（採点時の観点）】

多様な回答が考えられ、その全てを示すことは分量が膨大になりすぎ、また一部のみを示すことは出題の趣旨をかえって誤って理解させるものとなるため、
一意の解答例は公表を避ける代わりに、キーワードや採点時に重視した観点を解説する。

I. 論述問題

（1）近年、学校教育における英語授業ではペアやグループでの活動が増えている。なぜ、そのような活動が重要なのかを第二言語習得の観点から説明するとともに、協働的な学習環境を作るために教師ができることを具体的な例を挙げながら論述しなさい。

・ペアやグループでの活動について、インタラクションに関する理論や学習者のグループダイナミクスなどの理論に言及し、第二言語習得の観点から説明している。
・協働的な学習環境を作るための教師の手立てについて、具体的な例とともに示されている。

（2）Dörnyei の L2 Motivational Self System（L2MSS）と Deci and Ryan による Self-Determination Theory（SDT）を比較し，それぞれの強みと限界を明らかにした上で，第二言語の学習や指導における有用性について論述しなさい。

・学習者の動機づけの観点から L2 Motivational Self System と Self-Determination Theory の各理論の概要について説明している。
・それぞれの理論の構成要素（例: Ideal L2 Self, Ought-to L2 Self）について言及し、強みと限界を論じている。
・それぞれの理論について、第二言語の学習や指導における有用性を説明している。

II. 解説問題

（1）Willingness to Communicate (WTC)

・英語教育において、学習者が第二言語でコミュニケーションをしようとする意志に関する概念であることを説明している。
・異なる要素から構成される階層的な概念であり、英語教育においては第二言語使用やコミュニケーションに対する自信などの概念との関連性があることを説明している。
・教育実践との関連について触れられている。

（2）タスクに基づいた言語指導（TBLT）
・タスクを中心としてシラバスを編成する外国語教授法であることが示されている。
・タスクを使って目標言語でのコミュニケーションの機会を与え、教室内での意味交渉を活発に行わせたり、インプット・フィードバック・アウトプットの機会が与えられたりすることを説明している。
・教育実践との関連について触れられている。

（3）偶発的学習と意図的学習
・語彙や文法などの言語項目の学習における学習者の意図と学習成果について説明している。
・偶発的学習は学習者が学習しようとする明確な意図を持たずに起こる学習、意図的学習は学習者が意図を持って行う学習であることを説明している。
・教育実践との関連について触れられている。

（4）目的・場面・状況
・学習指導要領において示される、言語活動が行われる具体的なコミュニケーションの文脈を構成する要素であることを説明している。
・コミュニケーションを行うことによって達成しようとする目的や、話し手や聞き手を含む発話の場面、コミュニケーションを行う相手との関係性やコミュニケーションを行う際の関係について言及している。
・教育実践との関連について触れられている。

合否判定の方法及び基準
入学試験は国際日本学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。 合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。